

に大水があふれ、堤が切れたり、切れる寸前で増水が止まったりしたことが数回あった。その結果堤防のカサ上げが行われ土堤の位置も一部変更され、桜並木が切り倒された。川中も広げられ護岸工事が立派にできた。

昭和十三年の時は土浦市の上流で堤防が切れた。一ヶ月降り続いた雨の後、危急を告げる半鐘が鳴ってから、鷹匠町の友人の家の庭に立つと胸までの水位になるのに五時間であった。午前五時であった。それ以後の増水がすざましいのだが、この時は中町の通りを本町に向つて歩き中城を通ると、道路は露出しており、大町の通りはうつつらと横なぐりの水に洗われ始めていて、町中が避難活動にはいった。

その前の晩、桜川の水位の増し具合を銭亀の橋まで見に行くと、水は橋にすれすれに迫り、いちじるしく川中も増し、奔騰というに近かった。黒い雨ガッパを身につけた数十名の一団が銭亀橋のたもとに現われた。航空隊の隊員達で、堤防の天場に水がのりはじめたところに、土俵を急に造つて重ね始めた。指揮官の声にきき覚えがあった。玉突き場で自分が相手をした準士官であった。

一時間位、一緒に働いた。心強かった。しかし結局はこの心尽しも水泡に帰したのであった。

戦後、食糧不足に國民全体が苦しんでいた頃、桜川の川口近い水田地帯が一季に水没しそりになり、周辺の農家は勿論、大勢の応援を受けて徹夜を続け土俵を盛り上げて水を防いだ。更に考えれば、この町の治水に献身した先覚の人々のことを総ざらいにすべきだが、今は暫くおく。こうして考えてくると、桜川は、土浦市と苦樂を共にして来たといつてよいであろう。

ところで、一般の土浦市民が考える桜川は、川口（霞ヶ浦に桜川が注ぐ川口）から、せいぜい虫掛の堰位までである。それより更に上流を、源流までもさかのぼって、自分の目で、しかとその姿をみきわめている者、要するにこの川の全貌を把えている者はもつと少からう。

人間が自然によせる絶大な信頼感と、その無限の生命力、奥行き、規模によせる畏敬とが、そういう行為の必要を認めさせなかつたといえよう。土浦市民の日常生活に川は全く密着して、事ある時以外、市民は改めて